二〇一八年二月六日　　日立目白クラブ

プログラムと演奏曲目のあらまし

一　長唄

長唄は歌舞伎の伴奏曲として江戸時代から発展してきた三味線音楽です。戦後は日本舞踏の伴奏音楽として演奏されるようになり、最近では古典曲、創作曲の単独演奏の機会も増えています。

元禄花見踊り

唄　川嶋文代　木下幸子　糸　若江早苗　本木寿以田鶴
寺田薫　長谷川治子

元禄花見踊りは、明治十四（一八七八）年、劇壇に輝かしい功績を残した新富座の開場式の余興に演ぜられた舞踏曲です。満開の上野の山に、元禄時代のきらびやかな衣装をつけた武士、奴、座頭、若衆、町娘、遊女等いろいろな階級の人々が集まって花見を踊るというもので、いかにも開場式にふさわしい華やかなで、陽気なものです。現代でも歌舞伎を代表する人気演目となっています。

二　小唄

小唄は江戸時代末期に、清元のお葉によって創設されました。長い邦楽の歴史の中では、最も新しい三味線音楽ですが、明治、大正を経て、昭和に黄金時代を謳歌することになります。左の二曲はそれぞれ昭和一〇年と三〇年代に作られたヒット曲です。

日吉さん

唄　若江早苗　　糸　本木寿以田鶴

江戸の代表的風物詩の一つがお祭りです。中でも「山王日枝神社祭」の祭礼は、氏子が江戸城主だったため「神田祭」と並んで「天下祭」と呼ばれていました。今日お聞きいただく、「日吉さん」は、六月のお祭り風景を唄ったものです。

先ず、四五基の山車と総勢五〇〇人の伊達男たちが、氏子の街を練り歩いた風景が唄われます。その行列を先導し、道案内した一番山車が大伝馬町の酉山車、二番が南伝馬町の猿山車でした。

次いで唄われているのが、境内の賑わいの様子です。余興に踊られる「手古舞」。昔懐かしい「うみほおずき」の売り声。子供相手の見世物「ぶんぶく茶釜」、「蛇の目の唐傘」等楽しい催しもので溢れています。

なお、この曲は小唄会の重鎮であった春日とよ家元が、「神田祭」の替え歌を補詞・作曲したと言われており、昭和時代を代表する名曲です。

青いガス燈

唄　石川通敬　　糸　本木寿以田鶴　替え　若江早苗

小唄の題材は、江戸の風物詩だけでなく、古典文芸、歌舞伎、新劇等多岐にわたりますが、明治の風物詩もその一つです。この唄は中山小十郎のヒット曲の一つで、明治期の雪もよいの夜、新橋ステーションに男性を送っていった新橋芸者の　艶姿を唄っています。「青いガス燈」「ギヤマングラス」「夜会巻き」「金春道」「吾妻下駄」と絵になるような道具立てを、現代的旋律で仕立てた小唄です。

三　端唄

端唄は、近世俗曲の一つで、三味線を伴奏として唄われる小歌曲です。小唄の母体ともなっています。上方端唄から発して一九世紀になると江戸で発達しました。庶民に親しまれた流行り唱で、多くの曲が今でも唱いつがれています。最近では市丸、石川さゆり、江利チエミ、森昌子等による唄が、ユーチューブで楽しめます。

お江戸日本橋

唄　川嶋文代　木下幸子　糸　若江早苗　本木寿以田鶴

寺田薫　長谷川治子

これの唱は作詞、作曲者不詳ですが、日本橋の民謡をベースにした俗曲として広く知られています。

木遣りくづし

同左

明治二十年代から東京の花柳界を中心に流行したはやり唄。東北地方に広く分布する木遣り唄「七之助節」が東京で酒席の三味線唄となったものです。なお、くづしとは三味線曲にしたという意味です。

四　踊り

日本舞踊は、歌舞伎舞踊を柱とした伝統芸能ですが、一九〇七年に坪内逍遙が「新楽劇論」を発表したのを契機に、新しい国民的演劇として新舞踊劇が創造されるようになりました。

夢しぐれ

踊り　寺田薫

これも新舞踊の一つで、お祝いの席で演奏される、新年会にふさわしい踊りです。